

子どもの成長と音楽 聴くことから歌うことへ

The Growth of Children and Music

(2006年3月31日受理)

小野文子

Ayako Ono

Key words : 子ども, 成長, 音楽, 聴く, 歌う

音楽の原点は、言葉話すのと同じように自分の思いを音にのせ、人と人が繋がることであろう。人は「聴く」ことから音楽体験を始め、聴いた曲を「歌う」ことを試みる。「歌う」ことは音楽活動の基本である。

はじめに

子どもたちのさまざまな能力や資質は独立的に発達するのではなく、相互に影響し、関連し合いながら発達する。音楽が音を素材としている以上、「聴く」ということを切り離して考えることはできないだろう。しかし「音楽を聴く」ことは純粋に感覚的な行為であるかという、必ずしもそうではない。最終的には聴力の問題以上に、より精神的な、あるいは知的な意味を持つものである。したがって、「いかに聴くか」ということは重要なテーマとなる。そして、表現としての音楽という面から見た場合、最も基本的なところに、「歌う」という行為があるといえるだろう。音楽教育の基盤には、まず、「聴く」こと、次に「歌う」ことがおかれることになる。

I. 聴くこと

「聞く」という能力は、すでに胎児の頃から、かなりのレベルで働いている。人は、それと意識する以前から、あらゆる音を聴きながら育つ。今、私達の耳に聞こえる「音の世界」は、必ずしも良い方向へ進んでいるとは思えない。街での騒音、機械音など、いたずらに耳を刺激する音は溢れている。それに引き替え、鳥や虫の声、木々を揺らす風の音など、子どもたちの感受性にささやか

ける音は、今では耳にする機会もかなり少なくなった。このような環境は子どもたちの成長に何らかの影響を及ぼしているであろう。少なくとも音楽を「聴く」ことの意味は、ますます大きくなっていると感じる。

1) 聴く力を養う

この場合の「聴く力」とは、音楽を聴くときに、そこから伝えられるものを感じ取り、受け入れる力である。物理的な聴力を指しているのではなく、単に音の高さや和音を聞き分ける能力を意味するものでもない。一般的に、新生児が最初に聞き分けるのが母親（養育者）の声であるように、子どもたちは必要を感じる方向に耳を傾け、自分にとって大切な音には敏感に反応する。その意味で、たいへん自己中心的な耳を持つと言えるだろう。したがって音楽を「聴く」という行為は、子どもたちにとって、必ずしも自然に行える事では無い。いわば「聴く耳を持たない」子どもたちを、いかにして「聴く」という姿勢に導くかというところから考えてみる。

子どもたちを「聴く姿勢」に導くための最初のポイントとして、まず「環境を整えること」が挙げられる。例えば、「音楽をリラックスして聴ける雰囲気を作ること」「指導者自身が音楽を好きで、健康であり、集中していること」といったことである。また「子どもたちに『聴くのが楽しい』、『聴いてみたい』と思わせるために、子

どもの目線に合わせた会話を交わしながら、さまざまな音楽活動や会話にリズムを作る」という考え方ができる。「環境作り」については、特に指導者の果たす役割は大きい。

音楽から何を聴くかということになると、百人百様の答えがある。最終的には各人の感性によって聴かれるのである。しかしながら、音楽という様式が人々の共通の喜びとして確立しているということには、各人各様の受け取り方という次元とは別の、もっと本質的な意味が隠されているわけである。つまり、音楽は、情景や心情を、時には思想までも伝えるコミュニケーションの手段であり、作曲家や演奏者が意図の有無に関わらず、あるメッセージを発せずにはいられないという事である。

音楽に何の先入観も持たない子どもたちは、いったいどのように音楽を聴き始めるのだろうか。そして、音楽を聴く事から、何を発見するのだろうか。

音楽の音には必ずニュアンスがあり、聴く人はそこから、あるイメージを受け取る。そのイメージには、常に聴く人の心が反映されているはずだ。

子どもたちにとって、興味を持つ事は、すなわち「好きなこと」であるといえる。音楽においても、聴く経験を重ねるなかで、一つのメロディーにある効果音、重厚なハーモニーなど、特に気に入る、「ここが好きだ」という部分ができる。

自分の好きなところを見つけられた子どもたちは、「この曲はメロディーが一回一回違って出てくるのが面白い」「珍しい楽器が出てきて素敵」「最初は元気な感じなのに真ん中のところで静かになるのが面白い」などと意見を言う。

これは子どもが積極的に音楽を捉えられるようになったことの証だと思う。このことは鑑賞曲に留まらず、他人の弾く音楽、仲間の音楽にまで及ぶようになる。さらに、アーティキュレーション、ダイナミクス、フレーズング、音色などにも影響を受けて自分でも表現しようとする。また、自分の演奏と目標とする音楽を近づけるために、両方の音をじっくり聴いて練習するようになる。

このようなかたちで、子どもたちの聴く姿勢が自然に広く深いものになるのは大変望ましいことだといえる。

しかし、子どもたちはそれぞれの感受性にしたがって自然に成長していくだけでなく、時には指導者の力を借

りて、まだ気づいていなかった価値に目を向けることも必要である。子犬を見てかわいいと思う心、花を見て感動する事と同じように、音楽を聴いて感動する人生は豊かであろう。同じものを見ても何も思わないで通り過ぎてしまう人と、何かを感じる人の人生は違う。音楽でも同じ事が言える。子どもたちが何となく通り過ぎてしまいそうな瞬間に「ちょっと待って」と声をかけ注意を促す。子どもたちと共に感動を共有するために、それを表現する役割を担う。これは、感性についてであると言っ

てよいだろう。

感性とは、さまざまな価値に気づき感じ取る能力である。特に「気づく」という点が大切で、受動的に感じ取るのではなく積極的に見出す姿勢に感性を磨くことのポイントがあるといえる。したがって、子どもたちの感性を刺激するためには、「気づく」ことの喜びを知らせる事が肝要である。それまで意識したことのなかった見方や聴き方から、新しい面白さを発見したとき、子どもたちの感性の領域は一步広がるといえる。

子どもたちが音感（絶対音感）を身につけていく過程は、多くの条件によって左右され、習得の時期や度合いに個人差がある。集中の苦手な子どもは遅く、自主性を持って意欲的に体験している子どもは早い時期から伸びる。幼児期において反応の少なかった子どもが、児童期に入ってから音感を発揮し始める例もある。そういった子どもたちの場合、表には現れていなくとも、素地は作られていたのだという事が分かる。

音感教育の成果は、目に見える形で現れるものではない。それは、「聴く」という姿勢のなかから育まれるものであり、結果として、より多くのこと、より深いものを「聴き取る力」だといえるだろう。音感とは「単に良い音に分かるだけでなく、真の美しさを見出す心の目や耳を持つ事」というが、行き着くところ「感性」に関わる問題ではないだろうか。

2) 聴く力と成長効果

人は得意なことや自信のあることに関しては、楽しみを見出すことも多く、積極的に取り組む姿勢を示す。その行動が、さらに力を伸ばし、自信を深めることにつながる。また、良い耳を持つということは、外に開かれた感覚を持つということであり、あらゆる物事に向かって

いく基本的な姿勢として積極的でありうるといえるかもしれない。しかしながら、聴く力を育むことがもたらす本当の成長効果とは、もう少し違うところにあるように思われる。

- ①集中力，注意力，洞察力が養われる。
- ②善し悪しを判別する能力が高まり，良い方向へ向かおうとする気持ちが強くなる。
- ③人格形成を促進する。

これらのことは，明らかに「聴く」ことの基本姿勢がもたらすものといえるだろう。

人の話をよく聴くということは，人として成長すべきあらゆる局面で，最も心を配るべきことともいえる。そのことを基本的な姿勢として身につける機会に恵まれない子どもたちにとっては，例えば学校の授業時間は苦痛以外の何物でもないだろう。また聴く力は，人と人との関係を大切にするとき，人の気持ちを洞察する力にもなる。それは，音楽を聴くということは，そこに表現された心を知ることであるからである。

Ⅱ. 歌 う こ と

子どもたちの歌唱体験は，まず曲を聴くことから始まる。曲を聴くことで情緒的感覚を呼び覚まされ，具体的表現への意欲をたかめる。また，曲をよく聴くことには，歌詞，リズム，メロディー，テンポ，ハーモニーを把握し，イメージを明確にする目的もある。

「聴くこと」から「歌うこと」への展開は，感じ取ったものを，表現する事によって体感するという作業で，特に音楽体験の初期の段階に大きな意味を持つ。すなわち，音楽的感性・感覚，演奏表現力の素地を作る，あるいは磨きあげるということである。

「歌う」という行為は，とりわけ身体的発達との関連性が強いので，子どもの発達状況に対する配慮が必要になる。発声器官の未発達な幼児期においては，言うまでもなく，完璧な歌唱を求めるのではなく，音楽への興味を育みつつ感覚を養うことに主眼が置かれる。児童期においては，時には際だった適正と興味を示す子どもが現れることもある。

1) 歌唱表現

言葉を発する以前から，子どもたちの心には，快，不快，喜び，怒りなどの基本的情緒だけでなく，嬉しい，怖いといった感情が芽生えている。それらを顔や発音で表現することからコミュニケーションが始まり，間もなく言葉によるコミュニケーションへと発展する。

「歌う」ことは「話す」ことと同様，声による表現である。「話す」ことにおいても，微妙な感情のありかたは表れるわけだが，「歌う」ことにおいては，音楽的な表現が加わることによって，より鮮明な表現が可能になるといえる。

また，「歌う」ことは，その歌に託された心を体感する経験であり，時には共感から歌の心と自身の心を一体化させる経験ともなる。

したがって，特に幼児期において，「悲しい」「寂しい」といった情緒ではなく，「嬉しい」「楽しい」といった肯定的な情緒を表現した歌を数多く歌うことは，子どもたちの情操を育むうえで非常に有効である。

歌唱体験の初期においては，まず曲に興味を持つことからスタートし，「歌う」意志を表出するところまで導くことが重要なポイントでなる。したがって，子どもの意欲を喚起するような曲を選ぶことと，リラックスして歌えるような環境を整えることが，まず必要である。子どもたちは，基本的に，歌詞のリズムや語呂の良さ，発音からくる面白さに惹かれて，「歌う」ことに興味を持ち始める。そして徐々に，曲の雰囲気に応じて表現する事を意識するようになる。ピッチや息継ぎが曖昧であることは，この時期では当然のことであるが，のびのびと活気に満ちた歌い方を促すことができたなら，子どもたちの感覚と感受性は確実に磨かれる。

幼児期に，「感じて歌う」ことに重きを置いて歌唱体験を積み重ねてきた子どもたちは，児童期にさしかかる頃から，声のコントロールに正確さが増し，歌詞の捉え方が深まるのと相俟って，一段と向上した表現力を示すようになる。さらに児童期後半では，例えば歌詞を持たない曲を音名で歌うような場合でも，それぞれの音楽的解釈に基づいて情感を込めた表現やメリハリの効いた表現を行うことが可能となる。

「歌」とは，すなわち音楽そのものであると考えられる。たとえ声を用いずに器楽的な表現を行う場合でも，心に

「歌」がなければ、気持ちを伝えることはかなわない。

歌は言葉と音楽が一体になった表現であり、また、身体全体を使って行う表現でもある。したがって、学ぶ要素としてそこに含まれるテーマは多岐にわたる。同時に、子どもたちにとっては、感情をストレートに表現しやすい方法なのでそこから吸収するものも多いと考える。

2) 歌うことがもたらす成長効果

子どもたちは「歌う」という体験を通じて、多くのことを学び、身につける。その目的、あるいは効果には、もちろん「上手に歌えるようになる」ということもあるかもしれないが、それ以上に、音楽的感性、感覚、表現力を養うということがある。また、それに付随して人間の成長を遂げることも見逃せない。

① 認識力の発達

言語機能の発達が子どもの知的発達に大きく関係している。特に幼児期においては、子どもたちが言語を獲得するスピードとエネルギーには目覚ましいものがある。そういった時期に、「歌う」ことを通じて、イメージ豊かに言葉を覚えていくのは、たいへん有意義なことと思われる。

歌の言葉である歌詞は、奥行きのある言葉で書かれた「詩」であり、音楽を伴って表現されることにより、さらに豊かな表現をかもし出す。したがって、子どもたちが質の高い歌を数多く歌う経験は、情操と感受性を育てることにつながる。特に児童期以降によく行われることだが、歌詞を「詩」として音読することにはさまざまな意義がある。日本語の持つ響き、リズム、抑揚、アクセントを認識することは、「歌う」という音楽表現のために素地となるばかりでなく、言語感覚を養う機会ともなる。

また、メロディーとの関連を意識して「詩」を読む事は、言葉と音楽の双方に込められた「心」を感受するきっかけともなるだろう。

さらに、「歌う」という表現に向けて歌詞を読む際には、一つ一つの言葉の意味をしっかりと認識することも大切だ。もし自分の知らない言葉があった場合、その意味もわからずに歌っていたのでは、表現は不十分とならざるを得ないだろう。

② 精神面の発達

幼い子どもが、聞こえてくる音楽につられて、一人で歌っているシーンはよく見受けられる。テレビから流れてくる歌などに、語尾の部分だけ声を重ねるといった特徴的な歌い方で、誰かに促されるわけではなく、自発的に歌う。子どもの感じている心地よさが自然に伝わってくる風景であり、そこはまさに「歌うこと」の原点があるように思われる。情緒や感情をストレートに表現することは、幼い子どもたちの本来的な行動といえる。したがって、歌唱体験の初期の指導にあたっては、そういった演出のエネルギーを損なうことなく、むしろ近い将来育むであろう自発的な表現意欲の源として、大切にされるべきである。

音楽には、喜ばしい感情をさらに引き立て、増幅する力がある。幼い子どもたちは、ただ「楽しい」という気持ちで歌う。それは、すでに音楽と共鳴しているということである。初期の音楽体験で早くも音楽の楽しさを実感できるのは幸福なことであり、敢えてそこに「正しい事」を持ち込む必要はない。

幼児期においてはこのような形で、感じた事をストレートに歌うことにより、自発的な表現力が養われ、精神面にも歌への前向きな影響を与える。

③ 音楽表現力の発達

着実な歌唱経験を積み上げた子どもたちは、声によるハーモニー表現、つまり合唱を体験することによって、さらにハイレベルな歌唱表現を学ぶことになる。つまり、正確なピッチ、声の質を融合させること、そして全体の響きを聴く力が求められることになる。

音楽的に優れた歌をたくさん歌う経験は、歌唱表現の枠を超えて、器楽演奏表現の向上にも影響を及ぼす。

「聴くから歌う」という流れは、最も自然に、かつ効果的に音楽体験を積み重ねる方法であると考えられるが、そのなかで「歌う」ことが果たす役割には、さらに多様な面がある。つまり、「歌う」ことには、音楽の基本的な事柄を体感しつつ学ぶ事、表現力を身につけること、創造性を養うことなどの効果が期待できる。これらの要素が音楽体験の中核にある事柄であるのは間違いなく、さらに器楽演奏における段階では、基礎力として活かされる。

終わりに

あらゆる演奏表現の基本としてなくてはならないものが「歌」である。したがって、子どもたちの音楽体験において「歌う」ことをどのように位置づけるかということが、非常に重要なテーマとして問われるところであると考えられる。

「歌う」ことは、子どもたちにとっても比較的容易に体験できる音楽表現と見られている。

しかし、その体験のありかた如何で、子どもたちの成長、発達に及ぼす効果は全く違うものとなる。もし、優れた曲を、適切な指導のもとに体験することができたなら、子どもたちは、必ず「歌う」ことを楽しみ、音楽の喜びを知ることができるだろう。

さらに、適切な時期に、着実な段階を追ってそれが行われるならば、子どもたちの音楽的感性、感覚、表現力、創造力の育成に資するところは非常に大きいものとなるだろう。

何よりも、「歌う」喜びを知り、「歌」を心の支えとして生きる事は、子どもたちの未来に力と安らぎをもたらすことと考える。